

# 大津 歴博 だより

2008  
No.71

## 平成19年度 新収蔵品の紹介



比良焼麦絵茶碗

比良焼は比良山麓で焼かれ、「比良」の刻印が押されるものが多い。また作品としては茶器が多く、本作品も、京焼風の端正なロクロ仕上げに鉄釉が施された名品です。



大津市歴史博物館

# 歴史博物館新収蔵品の紹介

## 購入資料

### 1 比良焼麦絵茶碗

口絵参照

一客

### 2 木造大津絵鬼念仏立像

鬼念仏は大津絵を代表する画題であり、江戸時代の天津絵を販売する商店の看板も、鬼念仏を描いたものが多かった。本作は立体の彫刻で、類例が非常に少ないが、看板的な展示が当時から行われていたものと考えられる。

一軀

### 3 野路玉川図

紀樞亭筆 木村騏道賛 一幅  
紀樞亭（九老、一七三四～一八一〇）は大津で活躍した画家。本作は、享和二年（一八〇二）と、描かれた時期も明記されるなど、他の紀樞亭作品と比較するときの基準作品となり貴重である。画題も、草津の東海道沿いの名所である野路玉川であり、賛文は大津袋町の俳人・木村騏道。

一幅

### 4 蜀棧道図

紀樞亭筆 一幅  
同じく紀樞亭の作品。図柄は、急峻な断崖をクローズアップし、崖に設けられた心もとない棧道を行く人馬の姿が描かれている。

一幅

## 受贈資料

### 1 琵琶湖産商工産品録

大津市・柳森安治氏寄贈  
明治十七年（一八八四）発行。大津の商店や旅館、料理店の店先風景等を描いたもので、当時の商店名や所在地、店舗の規模と来客風景などが銅版画で描かれている。収録店舗は六十八箇所。

一冊

### 2 紋帳早引大全

大津市・柳森安治氏寄贈  
江戸時代後期の出版。当時町人たちは大名の名前の区別が付けられるよう、家紋を集めた冊子を携帯していた。同種のものはいくつも出版されていたが、この「紋帳早引大全」もその一種。

一冊

### 3 天虎飛行研究所写真アルバム

大津市・佐藤生寿氏寄贈 二冊  
昭和十年（一九三五）から終戦の同二十年まで、大津市馬場の地先に設立されていた民間の飛行研究所（水上飛行機）。後には軍の管轄となり、多くの飛行兵の訓練が行われた。寄贈者は同研究所の出身者で、訓練風景写真などが二冊のアルバムに一三四枚も収められている。

二冊

### 4 田中宗太郎大津城等研究資料

二十一点

大津市・田中弘子氏寄贈  
田中宗太郎氏（一八九四～一九七〇）は戦前、地元の郷土史家として活躍され、特に戦国時代、浜大津にあった大津城の研究に貴重な業績を残された。これらの成果については、先の企画展「戦国の大津」でも展示したが、現在では確認することができない石垣の位置なども分かり、貴重な資料である。

### 5 大津陸軍少年飛行兵学校関係資料

十点

伊丹市・大槻秋男氏寄贈  
昭和十八年（一九四三）、大津市別所の地に正式に発足した少年飛行兵学校の関係資料。出身者からのご寄贈で、校歌や当時校内で使用された鉛筆、同校の記章などからなる。

### 6 陸軍歩兵第九連隊関係資料

七点

大津市・青木巖氏寄贈  
明治八年（一八七五）大津市別所の地に設立された陸軍歩兵第九連隊の関係資料。満州事変からの凱旋や除隊、連隊解散時に各々記念として配られた蒔絵の折敷や徳利、猪口など。

### 7 近江八景絵葉書

六十一枚

大津市・青木巖氏寄贈  
明治から昭和にかけての近江八景絵葉書。いずれの絵葉書にも、今では見られなくなった、のどかな風景写真が使用されており、大津市の景観の変遷をたどるうえでも貴重な資料である。

8 近江八景蒔絵折敷おとし

三点

大津市・青木巖氏寄贈

近江八景のうち、堅田落雁と瀬田夕照を描いた蒔絵折敷である。制作は明治期。近江八景は、本市の歴史の一大特徴であり、様々な展示に活用できるもの。

9 大津絵絵葉書

十枚

大津市・青木巖氏寄贈

明治から大正にかけて活躍した日本画家鈴木松年しょうねん（一八四八〜一九一八）の図柄になる大津絵十種絵葉書。いずれも力強い図柄で、江戸時代の天津絵の、明治における変化などが分かる。

第六七回ミニ企画展

「収蔵品蔵出し展」

●会期

四月十五日（火）〜五月二十五日（日）

これら新たに収集した資料については、右記のミニ企画展によってお披露目させていただきます。なお本展では、近年に収集した大津ゆかりの資料も合わせて展示します。バラエティーにとんだ、興味深い資料の数々を、お楽しみください。

〈購入資料〉



3 野路玉川図

〈受贈資料〉



2 木造大津絵鬼念仏立像



9 大津絵絵葉書



4 蜀棧道図

《受贈資料》



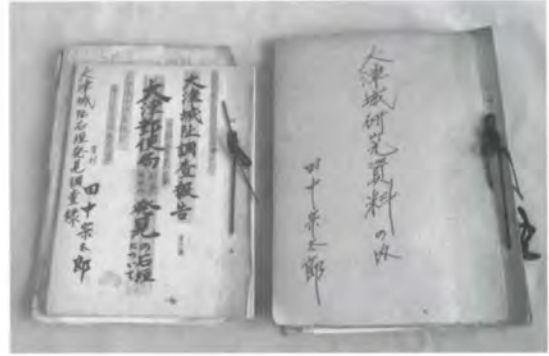
1 琵琶湖産商工産品録



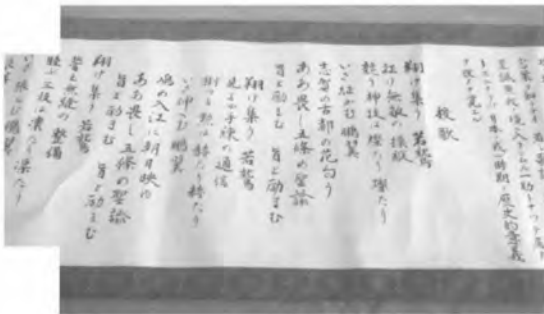
2 紋帳早引大全



3 天虎飛行研究所写真アルバム



4 田中宗太郎大津城等研究資料



5 大津陸軍少年飛行兵学校関係資料



6 陸軍歩兵第九連隊関係資料



7 近江八景絵葉書



8 近江八景時絵折敷

## 第六八回 ミニ企画展

### 「広重が見た東海道」

五月二十七日(火)～六月二十九日(日)

歌川広重の保永堂板「東海道五十三次」シリーズは、天保五年(一八三四)に五十五枚のセット売りが開始されました。このシリーズは、各宿場の風景や行きかう旅人の描写など、情感あふれる作品として知られています。また、他の街道シリーズのなかでも群を抜いた名品で、空前の大ヒットを記録しました。今回は、東海道五十三次全五十五枚を貼り交ぜた六曲一双屏風を中心に、人物東海道や五十三次名所図会など、他の広重作品も合わせて展示します。また浮世絵師は、自らの作品に版元の宣伝だけではなく、様々な工夫を凝らした遊び心を盛り込んでいます。気がつけば、なるほどと、ついニヤツとする仕掛けが満載されています。今回はそういった面白い情報も盛り込みながら、浮世絵のマニアックな楽しみ方を発見してください。また当時、庶民が旅に使用した携帯品やガイドブックなども展示し、江戸時代の旅の世界に入っていただけるように展示します。ご期待ください。



保永堂板東海道五十三次 大津  
図柄は広重のオリジナル?

## 第六九回 ミニ企画展

### 「絵変わり 大津絵の世界」

七月一日(火)～八月十日(日)

大津絵は、旅人相手にもつばら売られていた街道の土産物でしたが、単なる土産物として扱う人々ばかりではありませんでした。早くも江戸時代の十八世紀前半から、大津絵に熱いまなざしを送る愛好家が次第に登場しはじめます。なかでも、同業者?の絵描きたちは、大津絵を無視できなかったように、江戸時代には、画僧や職業絵師、文人画家たちが、そして近代には、日本画家や洋画家までもが、我流の大津絵を描いて作品としています。それらを見ると、自らの作風で描いて見せた作品、大津絵の図像を遊び心でアレンジした作品、大津絵の屈託のない雰囲気を追ろうとした作品、忠実に大津絵に近づこうとした作品などに大別できます。

ユーモアにあふれた描きぶりで多くのファンを持つ大津絵。その屈託のない、自由奔放な筆遣いに惹かれ、自らのモノにしようとした画家たちが手がけた、さまざまな大津絵をお楽しみください。



大津絵美人図 円山応挙筆

## 開発当時の雄琴温泉絵葉書

大正十五年（一九二六）頃

本年三月、J R湖西線雄琴駅は、おごと温泉駅に改称されましたが、この地が温泉として開発されたのは、大正時代に入ってからのことです。

雄琴の南、天台宗の法光寺（苗鹿一丁目）は、最澄（伝教大師・七六七〜八二二）によって開かれたと伝える古刹で、その境内の字蛇ヶ谷に念仏池と呼ばれる池がありました。広大な境内の北端にあたり、北国海道を少し西に入ったところす。その角には、最澄が刻んだとされる坂本六地藏の一つ苗鹿地藏が祀られていました（現在法光寺に移す）。

伝えられるところでは、この水を飲むと、難病たちどころに癒え、この池の泥を塗ると汗疹や皮膚病にも利く霊水だったといえます。

大正八年（一九一九）頃、地元の田中宗吉がこの霊水に着目し、成分を分析させたところ、ラジウム鉱泉であることが分かり、温泉として浴場兼茶店ができたようです。そして大正十二年四月、江若鉄道が雄琴駅まで開通し、利便性が高まると、温泉開発が本格的に始まります。

大正十二年一月に開催された雄琴村議会では、温泉開発の問題が議案として上がっていました。温泉のある土地の地上権を村が借り受け、その土地を開発業者に賃借する議案で、これについて村長は「温泉場設置計画二付大津市奥村房吉ヨリ交渉ノ次第有之、本村發展上有望ノ事業ニ付各員ニモ屢々協議ヲ煩ハシ今日茲ニ提出シタルモノナリ」と説明しています（「雄琴村会決議録会議録編冊」）。

特に産業もない農村だった雄琴村にとって、鉄道の開通と温泉の開発は、新たな可能性を秘めた魅力的な事業でした。

このような経緯で生まれた温泉施設が、絵葉書に見られる施設です。絵葉書は四枚あり、一枚は遠望を、一枚は泉源の祠を、残り二枚は高台に設けられた展望台からの眺めです。朱で「15. 7. 30」と捺され、これは大正十五年七月三〇日ということでしょう。ですから、開業まもなくの様子といえます。

温泉施設のある場所は、現在湯元館が建っている場所、苗鹿二丁目に当たり、建物の右上、高台に展望台が設けられていました。現在は、旅館や住宅等が建ち並び、湖面の眺望もきかない場所になっていますが、当時はほかにない場所でした。展望台からは、雄琴湾や湖面が大きく広がり、近江富士（三上山）をはじめ湖東の山なみが映る景色だったことが読み取れます。何故か「股覗き」の写真もあり、眺望の良さを売り込もうとしていたのでしょう。障害物がなにもない景色は、今から見ると新鮮に写ります。

（学芸員 和田光生）



開発当時の雄琴温泉絵葉書 個人蔵